

My Discovery of England

—写し鏡としての英国—

足 田 和 人

要 約

Stephen Leacock は幼い頃、家族と共にイギリスからカナダへ移住し成長した。カナダにはない歴史を享受していた生まれ故郷イギリスは、彼にとっての憧憬の地であったのである。Leacock は作家として思想家として、イギリスの姿を模範としカナダの未来像を描いていた。Oxford 大学で行った講演をきっかけにして、彼はイギリスの伝統や文化を観察し、様々な人々と交流する。そしてイギリスに対する畏敬の念は世界覇権を目的とした帝国主義擁護へとつながっていく。それはアメリカが牽引していた経済至上主義社会の、あまりに急速な発展に対する防御でもあった。対立する力がせめぎあう中で、彼はカナダの行くべき道を模索しつつ、国家の成熟を願っていたのである。

はじめに

Stephen Leacock は1921年にイギリスに渡り、本格的な講演旅行を行っている。*The Times* の紙面にも“a master of satire”と紹介されるほど⁽¹⁾、すでに彼の名声はロンドンにまで知れわたっていた。彼が見たイギリスの姿をもとに書かれたのが、1922年に発表された *My Discovery of England* である。ここでは彼の専門分野である政治経済はもとより、マスコミ、ビジネス、観光地、気質、禁酒法などにまで、ユーモアを交えて論じられている。

この年のロンドン講演における、*Punch* の編集者である Sir Owen Seaman の“Mr. Leacock’s humour is British by heredity; but he has caught something of the spirit of American humour by force of association.” (6) という紹介文も *My Discovery of England* の冒頭に載せられている。カナダの政治経済学者、ユーモア作家として知られている Leacock は、‘British by heredity’ と説明されているように、1869年にイギリス Hampshire 郡 Swanmore で生まれた。Leacock 自身の生い立ちからだけでなく、カナダという微妙な位置におかれた国の市民として、彼は大西洋を隔てたイギリスに対し、国境を接するアメリカに対してと同等以上に大きな関心を寄せていた。それは自らの生誕の地であり、世界の覇権を握っていた大国イギリスへの憧れでもあった。

Leacock のイギリスについての言動は、カナダとイギリスの間で起こっている問題や差異から生じたものであり、さらには彼自身とイギリスの間に存在していた葛藤を表してもいた。作家にとって、目の前にそびえたつ大国イギリスは、顔を向けずにいることは不可能な壁であり、映し

出される自分の姿に比べあまりにも大きな鏡であった。しかし Leacock はそこに映る自己と国家を真摯に見直すことにより、文学者、思想家としての彼自身を鍛えていった。

Leacock にとっての生まれ故郷であるイギリスは、彼の作家生活の中で、またカナダ国家の成熟を考える上で、一生を通して欠くことのできない重要なテーマであった。この小論では、彼が観察したイギリスの人々と文化、彼が支持した帝国主義を *My Discovery of England* を始めとする彼の著作の中から探っていきたい。

1

Stephen Leacock は1907年に Cecil Rhodes Lecturers の1人としてイギリスに渡ったことがある⁽²⁾。これは彼の30代の半ばを越えたばかりの年齢と、McGill 大学に就任してから6年程度であった経歴の短さを考えると異例なことであった。この発端は Leacock が Ottawa で行った講演にあった。当時のカナダ総督であった Earl Grey が、イギリス帝国統一に関する Leacock の愛国的で巧みな語りを噂に聞き、大英帝国の領土を回り帝国の大義を説く講演者として、彼を強く推薦したのだった。Leacock にとって生誕の地であるイギリスに請われて海を渡るのだから、大変な名誉であったに違いない。カナダ総督の取り計らいもあり、ロンドンでは、Rudyard Kipling や後のイギリス首相となる Arthur J. Balfour と会食する機会も得る。ロンドンの新聞社街では *The Times* や *The Morning Post* の記者達とも貴重な交流をもった。

1901年に大学での職に着いて以来、ユーモアとウィットに富んだ彼の授業や講演は、大学の内外で大きな人気を博していた。そんな彼にとって Oxford 大学で講演を行えるということは、文字通り生まれ故郷に錦を飾る仕事であった。この時 Rhodes 奨学生に向けて行った講演について、Leacock は書簡の中で次のように述べている。“Lecturing to university audiences is my forte, just as wax figures were the forte of Artemus Ward. I have lectured to assembled Oxford, with a pulse as even as if I were sitting in a Saloon” (97) この言葉通り Oxford での講演は和やかな雰囲気の中で、大成功を収めた。

このような結果はある意味当然のことと言えるだろう。Leacock は1876年、7歳の時に両親と共にカナダ、オンタリオ州の小さな村に移住した。環境の違いは甚だしいものであったため、幼い Leacock にとってはかなりの戸惑いがあったようである⁽³⁾。しかし母 Agnes は自らが受けたヴィクトリア朝式の教育を彼に与えた。彼の生まれた年から考えれば、イギリス本国の記憶はおぼろげなものであっただろう。しかし、彼の内面的基礎として、ヴィクトリア朝的価値観が確実に形成されていった。“British by heredity”として紹介された Leacock であったが、その言葉では表せないほど、彼の中でカナダ的意識とイギリス的意識は分割しがたいものとして存在していたに違いない。

このような生い立ちの Leacock は、イギリス本国で見聞した人々を様々な角度から観察している。*My Remarkable Uncle* の“L'Envoi: A Salutation Across the Sea”では“The British are an odd people”という言葉をくり返ししながら、逆に愛着を込めた語り口で短編集の結びとしてい

る。その中には次のような描写がある

Sometimes this modesty of speech is perhaps carried a little too far. An Englishman when he has to talk about himself, doesn't refer to himself as "I" but calls himself "one." In my club the other day a newly arrived Englishman said, "One finds Canada simply wonderful; of course one had seen India and all that, but here one finds everything so different." What could I answer except to say that one was terribly glad to know that one liked Canada, that if one would take a drink with one. It's better than the everlasting "I-I-I." Only I think that next time I'll call myself "two." (235)

カナダ人、アメリカ人の側から見て、あまりに謙虚すぎるイギリス人の言葉使いを、ユーモアを含めたからかいの対象としている。しかし、それは合衆国の経済社会に対してぶつけた *Arcadian Adventures of the Idle Rich* のような鋭い諷刺ではなく、カナダの田舎町とそこに住む人々を描いた *Sunshine Sketches of a Little Town* で用いられた、包み込むようなユーモアであることに気がつく。Leacock は "I think that perhaps you are right about the greater freedom of satire allowed to writers on this side of the water from the editorial point of view—: not however from the point of view of the public; as far as they are concerned you (that is one) may 'get away with it' or one may not." (93)⁽⁴⁾ と E.V. Lucas にあてた書簡⁽⁵⁾に書いている。聴衆の反応を常に意識していた Leacock は、イギリスにおいてもその姿勢を変えることはなかった。話し手主導ではなく、聞き手に合わせた彼の語りは、海を隔てた場所においても期待通りの手応えをつかむことができたのである。この書簡を見ても Leacock 自身、かなり気に入っていたユーモアのひとつだったということが見てとれる。

名士として他国へ渡ると、その土地で最初に出会う人々は、やはり新聞雑誌の記者達であろう。*My Discovery of England* の第2章 "I Am Interviewed by the Press" で、Leacock はイギリス国内でインタビューを受けた時の困惑を表現している。ロンドンの記者達の Leacock に対する見方は、アメリカ大陸の記者とは全く異なっていたのである。インタビューを行った記者は、その時々の Leacock の様子と外見を記事に載せる。朝食後に会った記者は "a brisk, energetic man, still on the right side of forty, with energy in every movement." と彼を描写し、昼食前の記者は "a peculiar languor," 午後2時近くの記者は "The old gentleman sank wearily upon a chair in the hotel lounge. His hair is almost white." (26) という記事にした。アメリカならば話は簡単で、記者はとりあえず人物を "dynamo" と呼んでおけば、その当人も読者もなんとなく納得してしまうというのである。

また、アメリカでは訪れた人に、その土地の印象を尋ねる。当然 Leacock はそのことを予想し、伝統的な街の素晴らしさや、未来の明るい展望をお愛想も含めて語る準備をしていた。しかし、ロンドンではそれが通用しなかった。"They seem indifferent to the fate of their city. Per-

haps it is only English pride. For all I know they may have been burning to know this, just as the Youngtown, Ohio, people are, and were to proud to ask.”(27) と彼らのプライドがそうさせていると Leacock は分析するけれども、「アメリカの戯曲はフランスのものよりも劣っているか」などに始まる、あまりに多くの芸術と文学に関する質問に対し彼は辟易してしまう。

しかし、生まれ故郷に対する親近感からなのか、ロンドンの読者に向けての配慮なのか、彼のユーモアは、章を通して柔らかなものである。上記の困った状況に関して “I felt that if any young man came along to ask about the structure of the modern drama he had better go on to the British Museum.”(31) というような表現が、この章の中では最大限に皮肉を込めたユーモアになっている。さらに Leacock はイギリスの聴衆に対しての心づかいを忘れていない。文中には “I am not offering any criticism of the London system of interviewing”(29) とか “I don’t want to speak in anger.”(31) と、彼らを傷つけようとする意図はないことをくり返し表明している。

Leacock はイギリスの人々に対するのと同様に、その社会や文化を鋭く観察していた。特に歴史と伝統なくして存在し得ないものについては、憧憬に近い眼差しを向けていた。あふれる自然と広大な大地を享受しているアメリカ大陸ではあるが、ヨーロッパが育んできた長い時間を考えると、その距離は海の隔たり以上に遙か遠くに見えただろう。

そのひとつとして、Leacock は *Punch* の諷刺に洗練されたものを見出していた。*Humor and Humanity* の中で彼は次のように論じている。

For the English joke we must go to *Punch*, a journal that many of us think unequalled in humor in all the world and certainly the most representative of English humor. In its early life, nearly a hundred years ago, *Punch* was somewhat different: it had more of the impatient temperament of youth, was more inclined to improve England by swearing at it than by smiling at it: but with years that come that mellow wisdom which realizes that humor and anger cannot go together, that even ‘righteous indignation’ belongs elsewhere. At what he cannot remedy the Mr. Punch of today may shake his head in sadness, but from his pen flows nothing but the ink of human kindliness. It is this genial and mellow quality which lends the chef charm to his page. (186)

伝統が根づいている *Punch* の風刺には、Leacock が描きたかった、“incongruity of human life”⁽⁶⁾の姿が表されているというのである。しかし残念ながら、彼は J.H.Cameron への書簡でカナダ版 *Punch* に否定的な見解を示している⁽⁷⁾。諷刺が成立するのは、作家の資質や能力だけでなく、それを目にする大衆の成熟が不可欠であることを、彼は知っていたのである。歴史をもつ国ともたない国の大きな隔たりを、遺跡や建築物に見るのではなく、社会を構成する人々の中に

存在する熟成した時間の中に感じていたのである。これはカナダ人 Leacock にとって大きな負い目であったのと同時に、イギリスに向けられた憧れをも表している。つまり、イギリスは長い伝統の中で成熟したユーモアを受け入れる素地をもっているが、カナダはまだそこまで至っていないということなのである。“Nothing Canadian is read accors[sic] the Border, and nothing Canadian reaches the English public.”(103)と書簡の中で述べている彼の嘆きは、大西洋の波にかき消されてしまうのである。

大学人であった Leacock は、当然 Oxford を始めとするイギリスの大学が享受する伝統と格式に憧れを抱いていた。*Discovery* の第5章“Oxford as I See It”の冒頭でまず着目すべき点は、McGill 大学を訪れた際に Rudyard Kipling が言った“You have here a great institution.”や、大学から名誉学位を授与された the Prince of Wales の“McGill has a glorious future.”(73)というお世辞の言葉を引き合いに出し茶化していることである。実際に大学の内部や教授陣も観察していないのに、このような言葉をかけてもらうのは、McGill 大学のためにも良くないというのである。

これから Oxford 大学について語ろうとしている状況を考えると、このユーモアはかなり程度の高いものであることがわかる。まず、前提としてそれぞれの名士に頂いた言葉は、荣誉あるものだということを前提にしながら、表面的な言葉は大学のために有益ではないとして、同時にまだ伝統の浅い大学であるというようなへりくだった姿勢を示している。その上で自分の場合は、“I said about Oxford should be the result of the actual observation and real study based upon a *bona fide* residence in the Mitre Hotel.”と宣言し、“Oxford is a noble University. It has a great past.”(74)という一見ありきたりな言い回しともいえる賛辞を送っているのである。Leacock のこの姿勢は *Discovery* 全体に共通しているが、Oxford 大学に対する言及ではその輪郭が特にはっきりと見てとれる。

Leacock の Oxford 大学に対する憧れは、カリキュラムでも、講義でも、教授陣でも、その組織でもない。社会での有用性や効率化された勉学や訓練に関して考えると、アメリカやカナダの大学の方がはるかに優れていて、Oxford 大学に対しての評価は皆無に等しく、全く役に立たないとまで言いきっている。そうではなく、彼にとって Oxford 大学の魅力はその400年以上も続く時間である。学舎、図書館、大学寮、いたるところにしみ込んだ歴史と伝統が彼を魅了しているのである。そして Leacock が最もページ数を割いて語っているのは、時代遅れの大学教授陣である。Oxford 大学はアメリカ的な計測可能な成果や、証明可能な効率性とは程遠い場所にあると彼は主張する。Leacock が考える教育とは、才能と意思のある学生に対して、大いなる学問の機会を与えることにある。そのような学生は、他の学生達と歩調を合わせる必要はない。教師との関係が確立されていれば、日々の授業の課題や試験に煩わされることなく、学生が知りたいだけ学びたいだけの学問が可能となるというのである。このような Leacock の考え方は、一種の学問的なエリート主義とも見てとれる。しかし、専門知識や学識をもった教授と、その道に近づこうと真に憧れる学生達の姿を、“This is an ancient mediaeval attitude long since buried in more

up-to-date places under successive strata of compulsory education, state teaching, the democratization of knowledge and the substitution of the shadow for the substance and the casket for the gem.”(86)というように、Leacock も身を置いているアメリカ的マスプロ教育を皮肉りながら、ゆっくりと時間が流れていた遙か昔の大学という学問の府を懐かしみ、未だにその空気が失われていない Oxford を、憧れと羨望のまなざしで見ているのである。

ところで Curry の伝記によると、Leacock が最初に McGill 大学で講義を行ったのは、ヴィクトリア女王が亡くなる前日であった⁽⁸⁾。Leacock 自身はそのことを誇りに思っていたようであり、女王への親近感のあらわれであると言えるだろう。その同じ日にロンドンの地にて「女皇危篤の由にて衆庶皆眉をひそむ。」(30)と日記⁽⁹⁾に書き記したのは、到着してからまだ3ヶ月に満たない夏目漱石だった。1867年生まれ of 漱石と、1969年生まれ of Leacock は同世代の人物である。ここまで Leacock とイギリスの人々と文化の関わりを見てきたが、さらにその輪郭をはっきりとさせるため、同じくイギリスに対して特別な思いを抱き、文化の全く異なる日本から海を渡ってきた漱石とロンドンの関わり方とを比較してみよう。

ロンドンに住み始めて以来、薄い太陽の光の下、ロンドンの町を歩くと真っ黒な痰が出るのに驚き、地下鉄のあまりの息苦しさに閉口する⁽¹⁰⁾。人々と言え、文学はおろか新聞さえも読まないにも関わらず知ったかぶりをし、下宿の人間達にいたっては、家の周囲より外はほとんど知らないという様子にあきらはてている。三十路を過ぎた男には似つかわしくない生活状況と、精神を蝕むような孤独の中にありながら、漱石は日記の中で次のように書いている。「日本ハ30年前ニ覺メタリ云フ。然レドモ半鐘ノ声デ急ニ飛ビ起キタルナリ其覺メタルハ本當ノ覺メタルニアラズ狼狽シツ、アルナリ。只西洋カラ吸収スルニ急ニシテ消化スルニ暇ナキナリ、文学モ政治モ商業モ皆然ラン日本ハ真ニ目ガ醒ネバダメダ」(46)⁽¹¹⁾

ロンドン到着の時に偶然出会った、ボーア戦争の帰還兵パレードの雑踏に始まり、漱石は西洋近代文化の様々な洗礼を受けた。街中では近代的な建物が立ち並び、人々の往来は激しく、交通機関は都市の内部だけでなく、網の目のように郊外に向かって伸びている。日本に比べて驚くほど都市化産業化が進んでいるロンドンの姿を見て発した上のような言葉は、皮肉を込めた物言いの裏側にある、彼の素直な思いであっただろう⁽¹²⁾。

漱石がロンドンにおいて、ある意味での挫折を経験した理由の一つは、日本がそうであったように、世界を見据える客観性に欠けていたことにある。別の言い方をすると、産業発展のお手本ということ以外に、日本とイギリスは関係性がなかったのである。留学というあまり金銭的に恵まれていない特殊な状況の中で、漱石はその矛盾を個人の内部で一気に受け取ってしまったのである。

一方、Leacock とイギリスの関係は、カナダとイギリスの関係が土台となっている。“Greater Canada: an appeal”の中で、彼は次のように言う。“Thus stands the case. Thus stands the question of the future of Canada. Find for us something other than mere colonial stagnation, something sounder than independence, nobler than annexation, greater in pur-

pose than a Little Canada. Find us a way. Build us a plan, that shall make us, in hope at least, an Empire Permanent and Indivisible.” (11) 漱石が、「日本は真に目が醒めねばだめだ。」と言ったように、Leacock の宣言もカナダに覚醒を求めたものである。しかし、その内容はイギリス帝国の一翼を担うという立場になっている。イギリスという高みから世界を見ている Leacock と、大都市ロンドンに押しつぶされそうになっていた漱石との差は明らかである。両者とも外部の人間であることに変わりはない。しかし、まだ名前も知られていなかった時点でも演壇をサロンのように感じ、実際に聴衆にも受け入れられた Leacock と、金銭的な制約もあったにせよ、自らロンドンの大学と距離を置き薄暗い下宿にこもった漱石を考えると、やはりその背後には個人の存在と引き離すことができない国家と国家の関係が見えてくる。ともに小国であったカナダと日本ではあるが、大国イギリスにおける体験は2人に全く異なる結果をもたらした。

Leacock の一見中途半端とも言える国家像は、今まで述べてきたような過去への道に通じるもののなのだ。つまり過去から連なる精神と文化への憧れである。イギリスの帝国主義もヴィクトリア朝を過ぎると、少しずつ衰退の影を落としていた。それにも関わらず、変わることをないイギリスへの思慕の情ともとれるような Leacock の考え方は、経済の発展とともにイギリスに並ぶ存在になりつつあったアメリカ合衆国と、その経済至上主義的価値観への警戒の印でもあった。地理的経済的にはアメリカ的な生活に巻き込まれながらも、文化的政治的にはイギリスの一部でありたいというように、両方の価値観をバランス良く配置しているのである。ご都合主義的とも見えるこのような考え方ではあるが、Leacock にとっては、自分の出所を確認できるものであり、アイデンティティを保証すると同時に、将来にわたるカナダの発展を信じさせてくれる守り札でもあると信じていた。そして彼のこの信念は、次の章で述べる Leacock のイギリス帝国主義擁護にもつながっていくのである。

2

My Discovery of England の第4章、“A Clear View of the Government and Political of England” の冒頭に、イギリス王族との Orillia での思い出話が紹介されている。Duke of York (後の King George) が G.T.R. (Grand Trunk Railway) の Orillia 駅⁽¹³⁾ に立ち寄った際、Leacock は代表団の一員として出迎えている。“Perhaps we understand kings and princes better than the English do. At any rate, we treat them in a far more human heart-to-heart fashion than the English custom, and they respond to it at once.” (49-50) と語るように、Orillia 市長をはじめとした市民達が王子を取り囲み、手を伸ばして握手を願い、快く彼はそれに応じた。町のホテルには王子歓迎の食事も用意されていたが、日程の関係で次の町に向かってしまったという。Leacock は、格式ばって、冷たさを感じたイギリス本国での扱われ方と比べると、このような Orillia でアットホームな歓迎をカナダ的なものとして大変誇りにしていたようである。

また、“Is Prohibition Coming to England?”においては、イギリスで乗った列車のウェイターが、ビールやワインを勧めてくるのを見て、“When I first saw this I expected to see the waiter arrested on the spot. I looked around to see if there were any ‘spotters’ (detectives) or secret service men on the train”(145)と、とぼけている。当時、彼の別荘のあるオンタリオ州でも禁酒法は施行されていた⁽¹⁴⁾ので、イギリスで酒が飲まれている状況に驚いたふりをしているのである。ここからユーモアを交えて禁酒法に関してイギリス支持の論評を加える。

“The ancient idea was that a wayside public-house was a place of sustenance and comfort, a human need that might be wanted at any hour. It was in the same class as a lifeboat or an emergency ambulance.”(150-1)、というように、その役割は極めて重要で、パブを維持することが伝統的イギリスの価値観にそったことであり、禁止されるべきものではないと説く。Leacock はカナダにおいても、禁酒法反対の文章ならば原稿料は要らないとまで豪語していた強硬な反対論者である。しかし、その内容は攻撃的なものではなく、イギリスまで禁酒法が襲ってくるはずがないという確信のもと、これらの土地に根づく文化的奥行きを深さを紹介しているのである。

Leacock は前章でもふれた Cecil Rhodes Lecturer としての講演旅行を元にした、“Greater Canada: an appeal”の中で、自分自身を‘imperialist’であるとしている。“imperialism means but the realization of Greater Canada the recognition of a wider citizenship”(4)というように、イギリスとカナダの繋がりを示し、“Find us a way. Build us a plan, that shall make us, in hope at least, an Empire Permanent and Indivisible.”(11)という運命共同体としてのイギリス帝国を標榜し文章を終えている。

“The British Soldier”は *My Remarkable Uncle* の中に採用されている文章である。これはヴィクトリア朝の英国軍人像を“the nation’s defender and the nation’s hero”(33)と理想化し、軍人を歌った童謡や詩を引用しながら、Leacock の時代にはもうその姿を見ることはできないと嘆いている。ボーア戦争で戦った Thomas Atkins を賞賛する“Soldier of the Queen,” “good’un heart and hand,” “credit to his calling and to all his native land”という形容からは、Leacock が帝国の世界進出を肯定しているということが読みとれる。これまでに述べてきたような彼の生い立ち、王族との思い出や、禁酒法への反論からわかるように、イギリスに対して理屈を越えた親近感があったのである。Leacock の帝国主義支持はここから始まるものである⁽¹⁵⁾。

Remarkable Uncle の “Laughing Off Our History” において、Leacock は “King Arthur’s Knights of the Round Table were heroic to Tennyson and comic to Mark Twain.”(111)と言っている。Leacock は Mark Twain を作家として尊敬し、そのユーモア技法を最大限に賞賛している⁽¹⁶⁾。Twain の伝記を著しているのを見ても、彼のその思いがわかる。しかし、Leacock が伝記の中で Twain のユーモアの真価は “by trying to be funny” によるのではなく、“by trying to tell the truth”(3)であるためであると述べた言葉が、Leacock と Twain の皮肉

な相違を暗示させている。

Leacock の講演旅行から遡ること12年、Twain もペイジ植字機への投資に失敗し、その借金返済のため1895年に世界周遊の講演旅行に出発した。バンクーバーから出航し、翌年イギリスに到着するまで、ニュージーランド、オーストラリア、セイロン、インド、南アフリカを周り、多くの講演をこなした。ちょうど Leacock と逆まわりで世界を渡っていたのである。しかし、反対向きであったのは、方角だけではなかった。Twain はこの旅行での体験から植民地政策を批判し、反帝国主義の先鋒となっていくのである。Twain が向かった方向と、Leacock が信じた道をここで少し比較してみたい。そのことによって、Leacock の帝国主義の全体像が、さらに明確なものとなるだろう。

1897年に出版された *Following the Equator* は、Twain 講演旅行におけるヴィクトリア朝の広大な領土で見聞した経験を元にかかれた旅行記である。インドでの新鮮な体験を “Even now, after the lapse of a year, the delirium of those days in Bombay has not left me, and I home never will.” (348) と懐かしがっている反面、次のような一節が顔をのぞかせている。 “It needed closing, or cleaning, or something, and a native got down on his knees and went to work at it. He seemed to be doing it well enough, but perhaps he wasn’t, for the burly German put on a look that betrayed dissatisfaction, then without *explaining* what was wrong, gave the native a brisk cuff on the jaw and *then* told him where the defect was. It seemed such a shame to do that before us all.” (351) この文章から当然連想されるのは、Twain の幼年時代に身近なものであった奴隷制である。

Twain が見ていたのは、生まれや育ち、貧富の差、肌の色などには左右されない人間そのものの存在だった。これは *A Connecticut Yankee in King Arthur’s Court* の中で主人公 Hank Morgan が言う、 “A man is a man, at bottom. Whole ages of abuse and oppression cannot crush the manhood clear out of him.” (390) という言葉によく表れている。そのような前提に立つと、ドイツ人によってひどく打たれているインド人召使を正視できなかったのである。また Twain の *Speeches* には、当時記者であった Winston Churchill⁽¹⁷⁾ を彼が聴衆に紹介した時の言葉がある。イギリス人と、アメリカ人の母をもつ Churchill に掛けて、 “England and America: yes, we are kin. And now that we are also kin in sin, there is nothing more to be desired.” (129) という辛辣な表現をしている。

一方の Leacock は、自分自身が親しんだイギリスの伝統と、アメリカの民主主義とが合わさった状態を理想としていた。その間に自国カナダ、言いかえれば自分自身の立場を置いていたのである。したがって、ハワイ、サモア諸島、及びアジアを含む太平洋への覇権は、彼が描いていた世界の姿に適合していた。Twain が見ていた人間ひとりひとりの尊厳に重きを置く視点とは違い、ヨーロッパを中心とする社会の枠組みに合わせて世界像を描いていた。その世界像は Edward Said が *Culture and Imperialism* において19世紀イギリス小説は帝国主義を支援する役目を果たしつつ、寄り添っており “representation itself has been characterized as keeping the sub-

ordinate subordinate, the inferior inferior” (80)と看破したプロセスによるものだった。祖国喪失者として帝国の価値観から離れたところにいた Joseph Conrad でさえ、*Heart of Darkness* で描くことができたのは帝国主義の外枠であり外界との接点までであった、と Said が論じるのと同様に、地理的には遠く海を隔てた異国にありながら、Leacock の表象し描いていたものは、「西洋の近代社会における制度的な力」の内側で形成された典型的価値観だったのである。

ボーア戦争に賛成している Leacock の考え方⁽¹⁸⁾からもわかるように、彼の目には抑圧される現地人の苦しみを直に見るような立場をとらず、彼にとってのイギリスとアメリカはカナダにとって後を追うべき大国であり、それぞれに優れている点を実現させていくためのお手本でなくてはいけなかった。カナダというフィルターを通して帝国主義者であるということは、理想主義的、空想主義的に陥る危険性をはらんでいた。自分が ‘imperialist’ であるという言葉に続けて、彼の考える帝国主義を次のように説明している。“the imperialism of the plain man at the plough and the clerk in the counting house, the imperialism of any decent citizen that demands for this country its proper place in the councils of the Empire and in the destiny of the world. In this sense, imperialism means but the realization of a Greater Canada, the recognition of a wider citizenship.” (4)

その一方、政治経済学者である Leacock の目は、*Discovery* の“Business in England”にあるように⁽¹⁹⁾、イギリス経済が衰えを見せていた状況を把握していた。*Arcadian Adventures of the Idle Rich* では、有用性は認めながらも、進み方があまりに急激すぎる経済社会と、その時代に翻弄される人間達に向かって警告を発した。Leacock は政治経済学者として生計を立てる道を選びながら、イギリスを擁護し帝国主義を信奉した。Leacock が認識していたジレンマは、カナダのジレンマでもあった。板ばさみの状態で唯一彼が頼ることができたのは、当時も脈々と続いていたイギリスの伝統であった。その伝統が力を伴って表されていた形が帝国主義だったのである。彼がカナダ人として支持した帝国主義は、過去と未来の綱引きのようであった。戻らない過去に楔を打ち込み、進みすぎる未来にブレーキをかけるためには、イギリス帝国主義の存在と繁栄が不可欠だったのである。

イギリスに代表される過去の記憶と、アメリカが牽引する未来像は、共にカナダにとって必要なものであると Leacock は認識していた。Gerald Lynch は Leacock を Tory-humanist という観点から “He [Leacock] rejected the radical solution of anarchism, revolutionary socialism, and bolshevism: he perceived the dangers of unrestrained liberal individualism and the limitations of technological progress. (21)” と説明しているが、Leacock はアメリカのようにヨーロッパという過去と手を切って未知の国を作っていくのではなく、大国イギリスの伝統と歴史に範を求めながら、カナダという国で新しい理念の形成と、手のつけられていない国土の発展を願っていた。Leacock の帝国主義は、過去と未来の接点を保証する掛け金の役割を果たしていたのである。

む す び

カナダ人なら誰もが知っている、古き良き田舎町を描いた *Sunshine Sketches* の冒頭⁽²⁰⁾で描かれている田舎町 Mariposa は、自分たちが育った国への愛着を示したものである。開拓当時の記憶を残す多くのカナダ人がそうであったように、Leacock 自身も小さな村や町を大切にした人物であり、そのような共同体における古い価値観を終生尊重していた。そして遠い歴史の記憶を遡っていくと、行きつく場所は Leacock の生まれ故郷イギリスの Hampshire であった。彼の人生はここから始まった。

一方人生も半ばを過ぎた頃、彼の前に繋がる未来には、*Arcadian Adventures* で描かれているような殺伐とした世界が待ちうけていた。資本家達は Mausoleum Club の一室で葉巻を煙らせながら、“you would never know that the slums existed — which is much better.”⁽⁸⁾ と言い放ち、資本の力によって街を隅々まで支配する。個人の自由と経済システムの発展を最大限まで認めるアメリカ的未来像の到着点は、Leacock にとっては認めがたい世界であった。

Leacock の文学作品や社会批評には、カナダ的な要素とイギリス、アメリカ的な要素が混在していて、著作によってその割合は常に変化している。しかし彼が求めた方向性は、James Steele が “his political writings offer an account of the evolution of the state as a political form and appreciation of the historic role of nations and empires in its development.”⁽⁵⁹⁾ と述べているように、カナダの政治的経済的發展を何よりも求めるものであった。つまり、彼が政治的立場として支持した帝国主義は、どうしても消し去ることのできない歴史の出発点だったのである。それは自身の出生であり、カナダという国家の存在の原点であった。しかし、ふと振り返ってみると、彼が懐かしがった過去の町はもうカナダに存在していなかった。そして、社会の中で大切であると信じていた博愛主義は、発達した資本主義社会では受け入れられるはずがなかった。したがって、彼は両者の中庸を取りいれながら、少しずつ社会を変革し作り上げる立場についた。大学の学期中には Montreal の都会の喧騒に身を置き、それが終ると田舎町 Orillia の別荘で静かな時間を過ごしていたのも同じ理由だったであろう。

Remarkable Uncle の最終章 “L’Envoi: A Salutation Across the Sea” では、イギリス人の奇妙な点をいくつも取り上げ、まとめとしている。イギリス人は、自分達独自のやり方を変えない。イギリス人は、休暇の時にもブライアーパイプとクリケット道具をもっていく。イギリス人には、定まった道德律をもたないが、「あるべきこと」を知っている。イギリス人は地球上のどこにいても、独自の飲食の作法を守る。そして、“OH, YES, THE BRITISH ARE AN ODD PEOPLE — and I like all their odd ways. Well, after all, why not? I mean to say, one was born in Hampshire, Eh, what.”⁽²³⁷⁾ と自分の生まれを最後に紹介し、作品を結んでいる。ここにあげた Leacock の言葉に、あえてカナダ人としての Leacock の言葉を付け加えるとなれば、次のようになるにちがいない。“OH, YES, THE CANADIAN ARE AN GOOD PEOPLE — and I like all their good ways. Well, after all, why not? I mean to say, I

am a Canadian all my life.”

注

- (1) Leacock の伝記作家である Ralph Curry, *Stephen Leacock: Humorist and Humanist* によると, “The Times, September 27, 1921, p.12.” (359) とある。
- (2) その後, ニュージーランド, オーストラリア, 南アフリカを経て, バンクーバーに入航する。さらにカナダ国内でも講演を続けながら, モントリオールに戻った。“He was lionized everywhere he went, one of his greatest successes being at the University of Cape Town.” (45-6) と David M. Legate が言っているように, 行く先々で人気を博した。
- (3) *Humorist and Humanist* には “Stephen Leacock hated the animals, hated the isolation, and hated the chores with a passion which he never forgot.” (23) と書かれている。
- (4) “this side of water” という表現は, カナダと合衆国を合わせた意味で Leacock が頻繁に使っている言葉である。また, 彼はしばしば自分のことを American と呼ぶことがある。その理由は, *Discovery* の原注において, ユーモアを含め次のように説明されている。“I am a Canadian. But for lack of any other word to indicate collectively those who live between Rio Grande and the North Pole I have found it necessary again and again in this book to use the word ‘American.’ If Canadians and the Eskimos and the Flathead Indians are not Americans, what are we?” (25)
- (5) この書簡は1914年2月に Lucas から受け取った手紙に対する返事である。すでに1年が過ぎた1915年2月に書かれている。しかしこの書簡はこの時点で投函されることはなく, 1917年5月に思い出したように書き足され, ようやく送られたものである。
- (6) *How to Write* では Leacock の考えるユーモアの理想像について言及されている。“The best definition that I know is: *Humour may be defined as the kindly contemplation of the incongruities of life and the artistic expression thereof*. I think this is the best I know because I wrote it myself. I don’t like any others nearly as well. Students of writing will do well to pause at the word *kindly* and ponder it well. The very essence of humour is that it must be kindly.” (213)
- (7) “The question of which you write (the establishment of a Punch in Canada) is very interesting one. It is a thing I have often thought about, — and so perhaps I am unduly possessed by the difficulties of it. To begin with it would be awfully hard to reproduce here the kindly human tone of Punch, never partisan and never bitter. I have never seen in it an unkind word. Our public would have to be educated to it, and our writers would have to learn the art of it.” (*Letters* 103)
- (8) “Stephen gave his first lecture at McGill the day before Queen Victoria died. Even with his flair for the dramatic, he could not have planned it better himself. His whole life — politics, economics, manners — was to have a Victorian touch, and he was proud that his career in political economy had started in the reign of ‘the Queen.’” (69-70 Curry)
- (9) 『漱石全集』第19巻 (明治34年1月21日「月」)
- (10) ロンドンの薄暗い冬の街の様子を *Discovery* の中で Leacock は “The whole subject of daylight in the London winter is, however, one which belongs rather to the technique of astronomy than to a book of description. In practice daylight is but little used. Electric lights are burned all the time in all houses, buildings, railway stations, and clubs. This practice, which is now universally observed, is called Daylight Saving.” (44-5) というようなユーモアに変えている。漱石の陰鬱そうな印象と比較してみると興味深い。
- (11) 『漱石全集』第19巻 (明治34年3月16日「土」)

- (12) 『漱石全集』第12巻「露西亞と日本は争はんとして争はんとしつゝある。支那は天子蒙塵の辱めを受けつゝある。英国はトランスヴァールに金剛石を掘り出して軍費の穴を填めんとしつゝある。此多事なる世界は日となく夜となく回転しつゝ波瀾を生じつゝある間に我輩のすむ小天地にも小回転と小波瀾があつて我下宿の主人公は其彫大なる身体を賭してかの小冠者差配と雌雄を決せんとしゝある。」(31)
- (13) *Sunshine Sketches* の“L'Envoi”で描かれた Mariposa 駅のモデルといわれている。
How vivid and plain it all is. Just as it used to be thirty years ago. There is the string of the hotel 'buses, drawn up all ready for the train, and as the train rounds in and stops hissing and panting at the platform, you can hear above all other sounds the cry of the brakemen and the porters:
“MARIPOSA! MARIPOSA!.” (186)
- (14) McGill 大学のあるケベック州では、当時もアルコールを手にすることができた Ontario 州にある Leacock の Old Brewery Bay と名づけられた彼の別荘には、ケベック州からアルコールを持ち込んでいた。そのワインセラーは現在も当時のまま残されている。
- (15) そのような彼の考え方の原点は、Leacock の自伝とも言える未完の作品 *The Boy I Left Behind Me* の中に描かれている。“Our news from the outside world came solely in the form of the *Illustrated London News* sent out by my grandmother from England. In it we saw the pictures of the Zulu War and the (second) Afghan War and of Majuba Hill. With it we kept alive the British tradition that all Victorian children were brought up in, never doubting that of course the Zulus were wrong and the Afghans mistaken and the Boers entirely at fault.”(82)のという一節は、カナダで生活していても、イギリス的視点の教育が行われていたことを示している。
- (16) His humour lay in his point of view, his angle of vision and the truth with which he conveyed it. This often enabled people quite suddenly to see things as they are, and not as they had supposed them to be — a process which creates the peculiar sense of personal triumph which we call humour. (3)
- (17) 南アフリカでの戦争体験を語る記者として、1900年の12月13日に Waldorf-Astoria Hotel で講演が行われた。
- (18) Legate の伝記には、“Leacock’s comments ... suggest approval both of imperial co-operation during the fighting and of the peace terms that brought a united group of British and Boer settlements into the empire as the Union of South Africa.”(111)という記述がある。一方、Twain はボーア戦争が始まる以前、1896年に南アフリカを訪れて以来、イギリス政府の南ア政策を非難していた。とくに Cecil Rhodes に対しては、*Following the Equator* の中で辛辣な言葉を発している。Philip S. Foner によると、“Twain understood that behind the British adventurers and military were the real fomenters of war in South Africa — the English capitalists who coveted the land and mines of the Boer republics.”(333)とある。
- (19) “... in England at the present day everybody seems poor, just as in the United States everybody, to the eye of the visitor, seems to be rich. In England nobody seems to be able to afford anything; in the United States everybody seems to be able to afford everything.”(133)
- (20) “I don’t know whether you know Mariposa. If not, it is of no consequence, for if you know Canada at all, you are probably well acquainted with a dozen towns just like it.”(13)

引用文献

- Chopra, Vishnu R. K. *Stephen Leacock: An Edition of Selected Letters*. Diss. McGill University. 1975
- Curry Ralph. *Stephen Leacock: Humorist and Humanist*. Garden City: Doubleday. 1959.
- Leacock, Stephen. *Arcadian Adventures with the Idle Rich*. Toronto: McClelland and Stewart Inc., 1914.
- . *The Boy Left Behind Me*. Garden City: Doubleday, 1946.
- . “Greater Canada: an appeal.” *Social Criticism: The Unsolved Riddle of Social Justice and Other Essays*, ed. Alan Bowker. Toronto: U of Toronto P, 1996. 1-11.
- . *How to Write*. New York: Dodd, Mead, 1943.
- . *Humor and Humanity: an Introduction to the Study of Humor*. New York: Henry Holt, 1938.
- . *Mark Twain*. New York: D.Appleton, 1933.
- . *My Remarkable Uncle*. Toronto: McClelland and Stewart. 1942.
- . *My Discovery of England*. London: John Lane the Bodley Head, 1922.
- . *Sunshine Sketches of a Little Town*. Toronto: McClelland and Stewart, 1931.
- Legate, David M. *Stephen Leacock: A Biography*. Toronto: Doubleday, 1970.
- Lynch, Gerald. *Stephen Leacock: Humour and Humanity*. Montreal: U of McGill P, 1988.
- Philip S. Foner. *Mark Twain: Social Critic*. New York: International Publishers, 1958.
- Said, W. Edward. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage.1994.
- Steele, James. “Imperial Cosmopolitanism, or the Partly Solved Riddle of Leacock’s Multi-National Persona.” *Stephen Leacock: A Reappraisal*. David Staines ed. Ottawa: U of Ottawa P, 1986. 59-68
- Twain, Mark. *Following the Equator: and Anti-imperialist Essays*. New York: Oxford UP, 1996.
- . *Speeches*. New York: Oxford UP, 1996.
- . *A Connecticut Yankee in King Arthur’s Court*. New York: Norton, 1982.
- Moritz, Albert & Theresa. *Leacock: A Biography*. Toronto: Stodart, 1985.
- 夏目金之助 『漱石全集』 東京 岩波, 1995